

心象の絵画世界

「街角美術館企画展「及川正遺作展」」

闇にうかび上がる白いアイリスの花弁。その上に置かれた供物のような鳥の死骸は、密やかに佇む貝殻とともに祭壇を彷彿とさせる静謐な空間をつくり出しています。

深淵な孤独感と神秘性をたたえたこの作品は、昨年(2003)6

月、77歳で逝去

された洋画家・及川正氏が最晩年に描いたものです。

及川氏は大正14年(1924)5)岩手県江刺市生まれ。昭和26年(1951)岩手県立美術工芸学校油絵科を卒業しました。昭和28年(1953)より古河市に居住し、昭和50年(1975)第29回二紀展にて褒賞受賞、二紀会同人に推挙されます。主に個展中心に活動を展開しますが、自由美術展、東京セントラル美術館油絵大賞展、北関東美術展等に入選、茨城県美術展覧会では長年会員を務めています。また、古河市の文化事業においても、第3小学校校



及川正「祈」

舎壁画、まくらがの里散歩道スタンプ原画、歴史博物館展示物などの制作に携わり、近隣で創作活動をする美術愛好家の作品発表の場として下総美術館を設立、後進の指導にあたるなど、地域美術振興に幅広く寄与しました。

およそ50年に及ぶ画業のなか、及川氏の手掛けた画題は、人物をはじめ風景、花や静物、曼荼羅、また郷里岩手県の遠野伝説に登場する河童に取材したもののなど多岐にわたりました。いずれもその作風は本作

品にみられるように、写実的でありながら現実感を伴わない幻想性に支配されていることが特徴です。及川氏の作品には、対象を細密に捉えるデッサン力、そして繊細なニュアンスを表現する彩色技法以上に、自らの心象を描き出す深い精神性が宿っているといえるでしょう。

(同展は7/21から8/1まで)

古河街角美術館学芸員 倉井直子